

古事類苑

器用部十七

坐臥具二

疊名稱

〔倭名類聚抄十四具〕疊

本朝式云、掃部寮、長疊、短疊唐韻云、徒協反、重疊也、和名太々美、

〔箋注倭名類聚抄六具〕

延喜掃部寮式有長疊又有短帖、無短疊、疊帖或通用○中按式所謂疊者

重席作之者、疊訓重、故名重席爲疊也略○中神代紀席薦同訓、按多々美多々牟用語、卽以爲其名也、

多々與所謂多々奈波流之多々同云美云牟、皆語辭

〔伊呂波字類抄太雜物〕疊タ、ハ、ミ

〔下學集下器財〕疊タ、ミ

〔類聚名物考調度四〕た、み 疊、帖とも書り

〔古事記傳十七〕疊は、白禱原宮武○神

段、大御歌に、須賀多々美、伊夜佐夜斯岐、倭建命、御歌に、多々美

許母幣、具理能夜麻能遠飛鳥宮段歌に、和賀多々彌ナなどありて、いと古き名なり、皮を以て疊

とせる例、此次に引る、弟橘比賣命云々、萬葉十六韓國乃云々などのごとし、さて皮疊カハダ、ヒキタマ、繩疊ヒキタマなどあ

るを以て見れば、上代には氈茵カモシトネなどのたくひをも、凡て多々美と云へりしなり、右の白禱原朝の

敷て、二人御寝ネと云しよしと知らる、敷て和名抄に、疊、和名太々美此ころに至りては、大御歌に、菅疊カサを

寢る物をも、疊と云しよしと知らる、敷て和名抄に、疊、和名太々美此ころに至りては、大御歌に、菅疊カサを

どあり、帖カモシトネ字は疊と音を通はして用なるべし、さて又其端に、鞆端、錦端、兩面端、布端、線端、黄端

など、にくさく見えたり、○中略、さて物を重ねるを多々牟とも云へば、疊と云名も、重ねるよしなり、